

『田舎司祭の日記』の聖性

野村, 知佐子
九州大学大学院文学研究科 : 博士後期課程単位修得退学

<https://doi.org/10.15017/4355458>

出版情報 : Stella. 39, pp.183-190, 2020-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :

『田舎司祭の日記』の聖性

野村知佐子

ジャン・ダニエルー神父は、1945年にジョルジュ・バタイユの主催した討論会『罪について』において、カトリックの立場から、聖性について次のように述べる――

聖人とは完全に無一物である状態を通じて神に近づくものであり、その過程には罪の介入はもはや認められない。無一物の状態において聖人は、神を所有することができないという絶望感を味わうが、聖性とはこの絶望感を魂の常態として受け入れることに外ならぬ。¹⁾

聖人の無一物の状態とはいかなるものか。また、その状態からいかにして神を得、そして失い、絶望を味わうのか。最後に、その喪失をいかにして受け入れるのか。本稿ではダニエルー神父の言葉を骨子に、ジョルジュ・ベルナノスの『田舎司祭の日記』の聖性に迫りたい²⁾。

《孤独》

無一物であるためには、まず人々から切り離され、孤独であらねばならない。フィリップ・ル・トゥーゼはアンブリカールの司祭の孤独について、次のように述べている³⁾。社会生活においては富裕層にとっての無産階級者、穏健派にとっては純朴な子供である。教会内部では、聖職者に預言者として対立し、罪人のためには聖人となる。無神論者の前では信仰者として闘い、背教者には篤信者として接する。また、旧来のキリスト者とは現代の使徒^{ちようじよう}として対峙する。そればかりではない。司祭は自分のことを責める長上に、一体自分のどこに非があるのか尋ねる。すると長上は「君が君であることだ」[336]と答える。彼はアンブリカールの司祭の単純さと、その属性に無自覚であることを非難するのである。司祭の属性は純粹であるがゆえに火を思わせる、そうル・トゥーゼは言うのである。さらに彼は続けて述べる。司祭は自分が火であることを自覚

していない。神の属性と言うべき、まったく他なる者として存在し、完全な孤独の内にある、と。ではこの孤独に耐えるため、司祭が抛りどころとしたのは何であろうか。それは貧者であることに誇りを持つことだ。ではその誇りは、いかにして彼から剥奪されるのだろうか。

《誇り》

貧しいがゆえに、アンブリケールの司祭は、自分自身に欠落している血の優越に対する憧憬を感じずにはおれない――

私は貧乏人の子であるにもかかわらず――あるいはそのためかもしれないが――実際には、家系の優越性、血の優越性しか理解できない。こんなことを言うと、バカにされるかもしれない。私はたとえば、本当の主人――君主とか、王とか――にはすすんで仕えたかったように思う。[246]

互いに対極に立つがゆえに、司祭は貧者と王侯貴族とのあいだに深い絆を見ようとする。彼が診療のために訪れたデルバンド医師もまた、貧者のなかにこそ真の王者であるキリストが宿ると信じていた。と同時に彼は凡庸な人間に対して抗いがたい軽蔑の念を抱いていた。彼の愛した貧者はすべて誇り高く、ゆわば彼自身の同類であった。アンブリケールの司祭の師であり、医師の友人でもあるトルシーの司祭は、デルバンド医師の凡庸さへの嫌悪を危惧し、何度となく忠告を与えていた。すなわち、凡庸とは彼らにとって込み入りすぎており、それは神の問題だと言うのである。トルシーの司祭は言う。キリストが貧者の姿を取るとは限らない。凡庸な人間の姿で医師の前に現れるかもしれぬと――

君はそういうところに主を探さぬくせに、一体何について苦情を言おうというんだ。主を取り逃したのは君の方だ。[284]

だがデルバンド医師は彼の朋友の言葉をついに聞き入れなかった。時を同じくしてアンブリケールの司祭は、夜の闇が自分のなかに流れ込んでくるという恐ろしい体験をする――

私は夜を吸い込み、呼吸する。夜は私の内へ、どこかわからぬ想像もできぬ魂の隙間から忍び込んでくる。私自身が夜なのだ。[273-274]

この夜の体験は、司祭がデルバンド医師と、その苦悩を共有するがゆえに生じ

たものであろう。だがこの苦悩への共感も虚しく、ある朝、デルバンド医師は野原で遺体となって発見される。トルシーの司祭は、医師のことを「正義の人」[282]と呼んだ。だが正義とはあくまで人間の価値観であって、それ以外の何物でもない。彼にとっての正義とは、まさしく貧者のなかにキリストの出現を見ることであった。彼の正義は打ち砕かれる。医師の死によって、貧しいからこそ真の王者に仕えたいというアンブリクールの司祭の切望もまた、打ち砕かれるのである。だが聖職者である司祭には、神の介入、つまり奇跡を待ち望むことができた。そして奇跡はおこるのである。

《奇跡》

神なきアンブリクールの教区で司祭が手にした唯一の栄光は、伯爵夫人の回心である。回心の証しとして、夫人は最愛の息子の形見の頭髪を暖炉に投じる。火から奪い返そうと、司祭が暖炉に突っ込んだ手のなかで、確かに掴んだように思えた黄金の髪は、たちまち熱のために失われる。あたかも掴んではたちどころに消える奇跡を象徴するかのよう。回心の朝を待たず、伯爵夫人は心臓発作で亡くなった。垣間見られたと思った神の姿も瞬^ま瞬間に不在へと転ずる。まさしく「光あれ」(創世紀1-3)という言葉が因果律を超えて光を出現させるように、奇跡は現れ、その役目を果たすや否や、速やかに消失する。

アンブリクールの司祭のおこした奇跡を目の当たりにした、伯爵夫人の令嬢シャンタルは、司祭が何か秘宝を心得ているのではないかと彼に詰め寄る。司祭は次のように言う――

それはもう失われた秘宝です、と私は答えた。たとえあなたが見つげ出されたとしても、あなたもそれを失ってしまわれるでしょう。そしてあなたの後で他の人たちがそれを伝えることでしょ。[391]

始点も終点もない奇跡は、無限の再開を思わせる⁴⁾。実現するや、次にどこに起こるか、言うことはできない。神の存在の証しともいえる奇跡を所有することは何人たりとも不可能である。仮にシャンタルが奇跡を呼び起こすことができたととしても、彼女もまた即座にそれを失わなくてはならない。司祭とシャンタル以外の人物に奇跡が生じたとしても同様である。しかるに伯爵夫人の死に、司祭は一時、神に対する信頼も勇気も喪失し、絶望に陥る。まさしく、神を所有することができない絶望を司祭は味わうのである。これによって司祭は

絶望に駆られ、日記には自殺をほのめかす記述が削り取られている。

伯爵夫人の死によって物議を醸したキリスト教教会を尻目に、トルシーの司祭はその愛弟子に、心のなかで歴史を遡り、自身がキリストに出会った時のことを想起してみるよう命ずる。このとき司祭はゲッセマネの夜のなかにいる自分を見いだす。死への不安に押しつぶされそうなキリストが弟子たちに向かって「眠っているのか」と声をかけたあの瞬間にである。彼はゲッセマネの夜、キリストと死の苦しみを共にするべく生まれついていたのだ。クロード・ガルダは、司祭が自分のあるべき場所を見出すまで、夜の浸食は続くと言指す⁵⁾。

さて、ゲッセマネの夜を心に秘めた後、司祭はそれぞれが青春、死、無信仰を象徴する3人の人物と出会わなければならない。

《青春》

伯爵夫人の甥にあたる外人部隊の兵士オリヴィエの名は、ゲッセマネの夜のもうひとつの呼称であるオリーブの園を思い出させる。と同時にオリーブは栄光の象徴でもある。半ば好奇心から、半ば皮肉な思いから、彼は司祭をオートバイでの遠乗りに誘う。このとき司祭は生まれて初めて青春の喜びを知る――

私にはわかった、青春が祝福されたものであることが――青春は冒険である――その冒険も祝福されたものであることが。そして私は説明のつかぬ予感から、その冒険のいくらかを――時が至れば私の犠牲がまったきものとなるためにおそらく充分なだけ――経験することもなく私が死ぬことを神が望まれぬということを理解し、《私は知った》。
[375]

この時感じた歓喜から、司祭は青春とは冒険であることを知る。そしてこの冒険を知らなければ、神に対する彼の犠牲は完璧なものにならないことを予感する。たしかにゲッセマネの夜は、キリストが死への苦しみを味わった場である。しかし死の苦悶の裏側が生への歓喜であるとすれば、青春の喜びを知らぬ司祭は、ゲッセマネの夜を片側しか生きていないことになる。青春の喜びは、神による剥奪を完璧にするために与えられたと言える。

オートバイでの遠乗りの後、司祭に友情を感じたオリヴィエは、司祭館に立ち寄り、彼に自身の一族のことや、外人部隊の兵士たちのことを語る。話題が祈りの習慣に至った時、自分はほとんど祈らないのだと言う司祭を押しとどめてオリヴィエは言う――

祈りの習慣というのは、僕に言わせればむしろ祈りについてのかわることのない関心、ひとつの戦い、努力ってことです。[……] あなたの顔は——失礼ですが——祈りで擦り減っているように見える。ひどく古いミサ典書か、石棺の蓋に鑿^{のみ}で刻みつけられたあの消えかけた肖像画を思わせませう。[……] その顔が僕らのように法の外におかれた者の顔になるには、たいして手間はかからないと思います。[380]

外人部隊の仲間と同じものを司祭のなかに感じ取ったオリヴィエは、アンブリクールの司祭に同類として限らない栄光を与える。同時に司祭は、キリスト教会から離れたアウトローに近い存在とされる。ここで彼は、栄光を持ちながらも、キリスト教会から追われた場におかれる。

《死》

司祭が次に会おうリールの町医者ラヴィーユは、自身が博士論文のテーマであった病で死に瀕している。彼は司祭のなかに死病を見いだす。と同時に、司祭と自分は同じような家系に属するものであることを見抜く。そして自分の同類であるからには、司祭もまた死を待つ苦しみに耐えることができると、医師は判断する。彼は司祭が胃癌であることを告知する。いわば医師は司祭の神による生命の剥奪を予見するのだ。そればかりではない。この人物の夢想のなかで展開される風景は、デルバンド医師の最期を彷彿とさせる——

これでもまだ狩りをやります。ドンと背中に引き金を引いて、生垣のなかへ倒れこむことなら誰にだってできるでしょう——そして翌朝、空が白むと、森の彼方の最初の煙、鶏鳴、小鳥のさえずりとともに、しっとりと露に濡れ、冷たくなって、静かに草のなかにうつぶせているのが発見される。どうです？ 誘惑を感じませんか？ [402]

ここで想起されるのはデルバンド医師の死だけではない。司祭の子供時代に見た美しい夜明けの風景をも彼に思い出させる——

子供のころ、明け方、よく露に光るあの生垣のところへ行っとうずくまり、ぐっしょり濡れて、震えながら、しかし幸福な気持ちで帰っては、死んだ母さんに頬っぺたを叩かれ、それから熱い一椀の牛乳をもらったものだった。[274-275]

生垣のなかの死体、幸福な気持ちで生垣にうずくまる子供、ラヴィーユの展開する自殺のイメージは、司祭の子供時代の思い出と錯綜することによって、司祭の生命のなかの生命というべきものを死の影によって打つ。長じた司祭の生

命と聖なるものである子供時代が、ここでは剥奪されようとしている。また、オリヴィエとの対話では、アウトローとはいえ、栄光に満ちていた司祭の祈りの習慣は、ここではモルヒネの代替物としてしか認められない。

《無信仰》

最後に司祭の会おう人物は、還俗僧のデュフレティである。この神学校時代からの朋友である人物は、日記という書記行為への執着と、結核に冒され死を目前にしていることから、あたかも鏡に映したかのように司祭と似通っている。だがデュフレティは信仰を失っている。そしてこの人物は、アンヌ・プニコーが指摘するとおり、凡庸な人物である⁶⁾。じじつ、オリヴィエが戦場で、ラヴィーユが死病で死への覚悟を固めているのに対して、デュフレティは自身の病が死に至るものであることを知らず、日々の生活に忙殺されている。また、家政婦の女性と同棲しているが、それが彼を教会から遠ざけた理由であることを認めようとしなない。あくまで「知的発展の結果」[413]という抽象的な理由のためだと思込んでいる。自分の死と対峙していないこと、愛ではなく、抽象的な理由で教会を離れたと思込んでいること、このふたつの理由から、彼は凡庸な人間だと言えるだろう。凡庸さとは、デルバンド医師を自死に追い込んだ人々の属性であり、アンブリケールの司祭に、ともすれば軽蔑の念を起こさせる属性である。それだけに、死を目前にした司祭が、凡庸な人間を通じて、その属性と和解することは、最後の戦いにふさわしいものと言える。

デュフレティの姿を自分のなかに投影するとき、司祭は自らを凡庸な人間として認識しなければならない。さらにはこの還俗僧に倣って彼の信仰を失わなくてはならない。アンブリケールの司祭が奪われる最後のものは、彼の信仰に外ならない。なぜなら青春の歓喜より、生命そのものより貴重なものを司祭が所有しているとすれば、それは彼の信仰に外ならぬからだ。だが彼にはすでに全てを神に捧げる覚悟ができています――

神よ、私は喜んであなたに全てを捧げます。ただ私は捧げる術を心得ません。ですから奪われるように捧げるのです。一番いいのはじっとしていることでしょう。なぜなら、私が捧げる術を知らなくとも、神よ、あなたは奪うことを知っていらっしやるから。それにしても、せめて一度くらい、たった一度だけでも、あなたに対して、惜しげもなく、鷹揚でありたいと、私はどんなに望んだことでしょう！ [410]

最期のとき、彼には終油の秘跡が与えられない。当番司祭が不在だったためだ。これは臨終の者から慰めを奪うばかりか、神の不在さえ感じさせる出来事である。しかるに彼は言う、「それが何だというのだ。全ては恩寵だ」[425]。青春の歓びも生命も、信仰も奪われ、完全な無一物となった彼に、神の見せたのはその不在の姿であった。その不在をも、彼は恩寵であるとした。ダニエル―神父の言葉どおり、アンブリカールの司祭は無一物で神の不在と向き合い、それを常態として受け入れたのである。

結 語

無一物とは、もちろん単に物質的な所有物を失った状態ではない。アンブリカールの司祭は、誇りを捨てさせられ、彼の起こした奇跡によって追い詰められ、ついには彼の愛した教区から追放されることが決まっていた。そればかりではない。彼は青春の歓喜、彼自身の生命、ひいては彼にとって何よりも貴重な信仰にいたるまで、神に捧げなくてはならなかった。こうして無一物となった彼が見たものは、神の不在であった。だが彼は、この絶望的な状況を受け入れる。まさしく神を所有できないという絶望を自身の常態としたのである。我々にとってこれこそが奇跡を目の当たりにすることに外なるまい。

註

- 1) Voir Georges BATAILLE, « Discussion sur le péché », *Œuvres complètes*, t. VI, Paris : Gallimard, 2003, p. 326. 清水徹・出口裕弘編『バタイユの世界』, 青土社, 1991年所収を使用した。この討論でバタイユは、キリスト教とは聖なるものと理性の混合物にすぎないと言う。善行が、恩寵を来たらしめるとすれば、聖なるものに、人為的な要素が介入することになってしまう。『田舎司祭の日記』では、司祭は奇跡を起こすものの、それによって彼は追い詰められ、絶望を味わうことになる。この不条理さがバタイユの述べる聖なるものに通じている。
- 2) 『田舎司祭の日記』のテキストとしては、プレイアッド版『小説集』(Georges BERNANOS, *Œuvres romanesques complètes*, t. II, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèques de la Pléiade », 2015) を使用し、同版のページ数のみ [] 内に記す。なお訳出にあたっては、渡辺一民による邦訳(『ベルナノス著作集』第2巻, 春秋社, 1976年)を参照し、必要に応じて表記に若干の変更を加えた。
- 3) Voir Philippe LE TOUZÉ, *Le mystère du réel dans les romans de Bernanos*, Paris :

Nizet, 1979, p. 242.

- 4) 始点も終点もなく、因果律を乗り越えた奇跡の介入は、モーリス・ブランショの〈作品〉の到来を思い起こさせる。〈書物〉が始点と終点を持ち、作家に属しているのに対し、〈作品〉は作家から独立しており、無限の再開として作家を訪れる。書記行為を通じて作家はふたつの位相を生きていることになる (voir Maurice BLANCHOT, *L'Espace littéraire*, Paris Gallimard, coll. «Folio essais», 2007, pp. 15-16)。アンブリクールの司祭もまた、因果律に則った日常生活を送るなかで、その法則を乗り越えた奇跡の介入を受ける。
- 5) Voir Claude GARDA, «La nuit dans *Le Journal d'un curé de campagne*», in *Études bernanosiennes* 18, Paris : Lettres Modernes Minard, 1986, pp. 62-63.
- 6) Voir Anne PENICAUD, «Approches de la vision bernanosienne de la pauvreté», *ibid.*, p. 115.